

日本語に即した読み書き障害モデル・支援法の構築を目指して

～読み書き困難児支援のために～

企 画・	田中みどり	(女子栄養大学栄養学部)
	高橋 登	(大阪教育大学教育学部)
	大伴 潔	(東京学芸大学教育実践研究支援センター)
	小林春美	(東京電機大学理工学部)
司 会 :	大伴 潔	(東京学芸大学教育実践研究支援センター)
話題提供 :	井崎基博	(愛知みずほ大学健康医療学部)
話題提供 :	小池敏英	(東京学芸大学教育学部)
	中知華穂	(東京学芸大学)
	銘莉実土	(東京学芸大学)
	須藤史晴	(東京学芸大学)
話題提供 :	高橋 登	(大阪教育大学教育学部)
指定討論者 :	田中みどり	(女子栄養大学栄養学部)

[企画主旨]

欧米の音素文字（アルファベット）を用いる言語の読み書き障害については、従来二重経路説が説かれ、獲得性読み書き障害に倣って発達性読み書き障害についても語彙下経路が不全で非語の読みに困難が大きい音韻性障害と語彙経路が不全で例外語の読みに困難が大きい表層性障害の少なくとも2つの型があると主張され、特に読み書き障害の発生率の高い英語では音韻性障害が多いことが強調されてきた。他方、視覚的に複雑で量も多い形態素文字である漢字を用いる中国語の読み書き障害には音韻性障害は1, 2割程度で、英語とは異なる特徴を示す。音節（モーラ）文字であるかなと形態素文字である漢字を併用する日本の読み書きの獲得には、かなを先に学習して漢字の習得に入るという順序性の他、かなの習得には音韻意識の必要が説かれる一方、漢字の読み書きにはかなとは異なる能力の必要と困難も指摘されている。本シンポジウムでは日本語の読み書きに即した習得・障害と支援法の構築を目指す。

極低出生体重児における読みの困難

井崎基博（愛知淑徳大学健康医療科学部）

出生時体重が1,500g未満の極低出生体重（VLBW）児は、学齢期になると読み書きに困難さを示しやすいことが分かっている。ほとんどの研究はアルファベット圏でのVLBW児を対象としており、日本におけるVLBW児の読みについてはほとんど研究されていない。私たちの研究グループは、9歳齢と12歳齢におけるVLBW児（知的障害や身体障害を有さない）を対象に、読み能力の発達の変化及び読みにかかわる諸要因について検討してきた。私たちは、①VLBW児のかな文字の読み能力は年齢とともに改善される、②VLBW児の読み能力には視覚的注意の能力が関係している、という2点を明らかにしてきた。発表では、VLBW児の読みに対して視覚認知や意味が果たす役割を考えたい。

1. VLBW児におけるかな文字の読みと年齢によるキャッチアップ

私たちの研究では、ひらがなを用いた読み障害スクリーニング検査の結果、9歳齢のVLBW児に比べて12歳齢のVLBW児は読み障害リスク有りとなった児の割合が少なかった。私たちの研究と同様の結果は、フィンランド語圏のVLBW児でも認められた。これは、ひらがなもフィンランド語も文字と音の対応が単純であることが関係しているのかもしれない。

2. VLBW児の読み能力と視覚的注意や語の意味との関係

Wolf & Bowers (1999)の読みの2重障害仮説では、読み障害児は音韻意識や命名速度の能力に問題のあることが指摘されている。その一方で、注意と読みの関係を捉えたattentional dyslexia（注意性読み書き障害）という概念も提唱されている。また、VLBW児は視覚的注意の能力に問題があることも知られている。私たちの研究では、VLBW児の音韻意識や命名速度の能力は標準出生体重（NBW）児のそれらの能力と有意な差は認められなかったが、VLBW児の視覚的注意の能力はNBW児の能力よりも低く、読みと視覚的注意の成績には相関が認められた。さらに、12歳児においては、読みの成績と語彙力の高さに相関が認められた。この傾向は9歳児には認められないものであった。この結果が示すVLBW児の読み・視覚的注意・語の意味の関係について理解できれば、と考える。

通常学級内における学習困難と日本語ディスレクシア児

小池敏英・中知華穂・銘苺実土・須藤史晴（東京学芸大学）

日本語ディスレクシア児の特徴は、ひらがなの流暢な読み障害との関係で近年、研究が進められてきており、その成果のひとつは、「診断治療のための実践ガイドライン」として医学領域では提案されている。他方、教育領域では、通常学級内における学習困難に対する対処が、LDのRTIモデルとの関連で注目されており研究が進められてきた。しかし、通常学級内における学習困難と日本語ディスレクシア児との関係については、十分検討されていない。我々は、通常学級に在籍する子どもを対象として読み書き調査を実施し、低成績に関与する背景要因の分析を行った。漢字書字に関しては、小学2～6年を対象として、漢字基礎スキルテスト（部品検出テスト、部首位置テスト、部首名テスト、筆順テスト）と認知スキルテスト（言語性短期記憶テスト、視覚記憶テスト）を行った（中村ら, 2017）。対象は、3,040名であった。書字テストで無回答が有意に多かった児童は0～5パーセントで認められた（重度低成績）。担任教員により学習上の配慮を行っていると判断された児童の低成績（要配慮—低成績）は12～28パーセントの範囲であった。漢字の読字低成績を伴う書字の重度低成績者の背景要因として、言語性短期記憶と部品・部首知識の低成績が独立して関与した。書字のみ重度低成績を示す者の背景要因にも、言語性短期記憶と部品・部首知識の低成績が関与した。要配慮—低成績児のオッズ比は、重度低成績児より低かった。漢字の読字低成績は、ひらがなの流暢な読み困難と関連することが報告された。言語障害通級指導教室に通級している2年生について、「診断治療のための実践ガイドライン」の質問紙調査の書字に関して、ディスレクシア児と判定された子ども（判定児）と判定されなかった子ども（非判定児）を比較すると、ひらがな読みの流暢性の成績は共に低成績を示したが、言語性短期記憶については、判定児は非判定児よりも低い成績を示した。これより、通常学級内に在籍し0～5パーセントの低成績を示す子どもとディスレクシア判定児の間には、ひらがな読みの流暢な読みが共に低成績を示すという特徴と共に、言語性短期記憶などの背景要因がディスレクシア判定児で重度低成績を示すという特徴を認めた。今後、読み書き障害の重篤度との関連で、その背景要因をさらに検討することが必要であることを指摘できる。

「日本語の読み書きのつまずき」を考える視点

高橋 登（大阪教育大学）

ディスレクシア（あるいはより一般的に、「読み書きにつまずきを抱えた子ども達」）に関しては、英語圏を中心に研究が取り組まれてきたが、近年では日本でも研究が増えている。当初は事例研究が中心であったが大規模な調査も行われるようになり、知見も蓄積されつつある。ただしそうした研究を見ていると、違和感を感じることも多い。本報告では、私の「違和感」の内実を整理することを通じて、「日本語の読み書きのつまずき」を考える上で必要な視点について考えてみたい。

違和感その1（発達的な視点の弱さ） つまずきを経験し続けた子ども達は、良くも悪くも様々なことを身につけた上で私たちの目の前にいる。たとえば小学校5年生と2年生とでは、同じ読み書きのつまずきと言っても、持つ意味は（子ども自身にとって）異なる。ディスレクシア研究では、このような、発達しつつある子ども達の姿をどこまで捉えきれているのだろうか。また、子ども達はそもそもの様な過程を経て読み書きを習得し、つまずく子ども達はその過程をどの様にたどるのだろうか。様々な検査バッテリーを駆使した研究は、一見すると精緻な分析を行っているように見えるが、実態としては、具体的な生活の中で子どもの姿を見失っているのではないだろうか。

違和感その2（統計的な視点の弱さ） 子ども達に何らかの課題を実施した場合、難易度が適切であれば、ほとんどの場合、成績にはばらつきが生じる。そうした意味では、「つまずき」はあるかないかで二分できるものではなく、軽微なものから深刻なものまで幅がある。そうしたデータについて、平均からのズレ（例えば平均-1.5SDなど）を基準にして、それに当てはまる子どもを「つまずきをもった子ども」として取り出すことがよく行われる。線引きによる区分は、子ども達の中にある幅を、つまずきの「ある」「なし」に二分することにより情報の過度な圧縮を行っているという意味で問題があるだけでなく、そうした線引きによって子どものつまずきを固定的な実体として見るということになるという点でも問題がある。線のすぐ右側と左側にいる子どもはつまずきにおいて質的な違いがあると言えるのだろうか。

報告では、具体例を挙げながら私の違和感について考えてみたい。そのことを通じて、私が考えるところの「日本語の読み書きのつまずき」を考える視点について提案することとしたい。